



駿河国の首都駿府・静岡

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝



七万平米におよぶ広大な水田を持つた登呂の遺跡がありますように、今日の静岡市の周辺は東国の中でも最も古くから開かれた土地で、今から一四五〇年前の大化の改新までは「珠流河国」(するがの国)と云う誠に綺麗な名で呼ばれていたところです。しかもそれからの長い歴史の中で、後に「駿河の合戦」と呼ばれるような戦争も全くありませんでした。日本中が苦しんだ戦国時代には、足利氏の一

族である今川家が実に巧みに戦国大名に変身して、文化の高い平和な都市を維持しましたから、多くの文化人が集った都市です。その繁栄する駿府に今から四六三年前、人質としてやって来たのが八歳の家康公でした。彼は一九歳で三河に戻るまで今川家の若き武将として成長し、結婚して長男を設けました。家康公の青春時代で

す。公はその後四五歳から四年間。六六歳から亡くなられる迄の九年間を駿府で過ごし、最後の大御所時代は駿府の人口が十万を超えて、世界でも十指に入る大都会であった時代でした。

家康公は駿府で専ら国際関係の改善に努め、秀吉公の朝鮮出兵で連れて来られた人々を祖国へ帰還させて朝鮮との国交を回復し、アジア各国との朱印船交易を進めました。国内の政治は江戸城の秀忠公の担当です。

最初の朝鮮使は江戸の秀忠公に面会の後に駿府で家康公の歓迎を受けました。家康公は駿河湾に船を浮かべて接待をしています。湾内に洋式帆船が停泊しているのを見て朝鮮使は仰天して帰国後の報告にそのことを書いています。(外国船

だったのか、ウイリアム・アダムスに作らせた西洋式帆船だったのかは不明です。)

それから二六〇年の時が流れ、徳川家は將軍位を降りて駿河七〇万石の大名として駿府に戻って来た訳ですが、多くの幕臣が従って来ましたが、それは大変な事であったと思います。その時、温かく幕臣達を迎えて下さった駿府の皆様には頭が下がります。この新しい静岡藩は短期間でしたが学問所を作り、沼津には兵学校を設けて、新しい時代への人材を生み出しています。

こうして考えて見ますと、静岡と徳川家の御縁も本当に深いものがあると思いますが、これからの新しい時代に向かつて、静岡が新たに発展してゆく御手伝いが出来ることを楽しみにしています。

